

巻頭エッセイ .....	1
シリーズ「福祉にみる「いのち」③」 .....	2
コラム「人間を考える」⑤ .....	3
2018 年度講座案内 .....	4

同朋大学「いのちの教育」センター  
〒453-8540 名古屋市南区稲葉地町7-1  
TEL 052-411-1373  
Eメール宛先 inochi@doho.ac.jp

## ● 同朋大学「いのちの教育」センターだより

本センターの創設・活動を主導し、長らく主幹、所員を勤めた田代俊孝教授が昨年度末をもって本学を退職しましたので、所員改選の本年度は一部異動があります。最終頁の「所員欄」をご確認ください。センターはひきつづき連続講座（全5回）の開催とBRIDGE（年2回）の刊行を中心に活動してまいります。今後ともよろしくお願いたします。

# 2018.7.1 No.48

## 「いのち」のバトン

木野 美恵子

人生 100 年時代になった。100 歳まで現役の医師であり、子供への「いのちの教育」に熱心であった日野原重明氏が、昨年 7 月に 105 歳で亡くなられた。生前「死は生き方の最後の挑戦、いのちに感謝して死んでいけたらどんなにいいだろう」といわれ、延命治療は希望されず、自然体の死を全うされた。小児病棟で、死を見つめ恐れる子供に、いのちは巡るもので、終わりではないことを理解させるため、レオ・バスカーリア原作の絵本「葉っぱのフレディーいのちの旅ー」を教材に、ミュージカルとして舞台化するなどいのちの教育を行った。これは、春に生まれた葉っぱのフレディが、冬に散るまでの話で、夏に人々に憩いを与え、秋に目を楽しませ、やがて散った葉っぱの栄養分が、また新しい葉っぱを生むという「いのち」の「尊さ」と「循環」を描いていたものだ。

高齢者も、介護が終わる時とは、死を意味する。死に行く人を支える「いのちの教育」が、介護教育にも必要だ。介護者は、幸せに生きてほしいと願うのに、利用者を苦しめることがある。例えば、認知症の人が、食事や、トイレの行為への忘れを、改善して欲しいと願う時。事

実はどうであれ、利用者の世界の中では、まだなされていない行為に対して、叱責や正確な事実説明は、安寧とは程遠く、不安と恐怖を伴う混乱状態となる。本人の認識を嘘とは言わない。支える者との相互理解の中で、死までの道のりをどう生きるかの問いに応えなければならない。

親鸞聖人は、人が欲にまみれず、共に生き、自然体でいることを教えてくれた。自分だけ良い思いができれば何をしてもよいと言うのでない。どうしたら共に生きることが実現できるかという永遠のテーマを与えてくれた。人にとって一番大切なのは、いのち。自分のいのちも、人のいのちもだ。私たちは、自分の生死を自ら操ることはできない。介護者ができることは共に生きる事、よく生きるために、ほんの少し近くにいる事だけだ。看取る方から、看取られる方への転換を受け入れる事は容易なことではない。さらに、死の痛みは、ままならぬことへの屈辱であり、不満であり、不安だ。最期に、私の人生は幸せだった、次の時代も平和に生きることができるよう。「後は頼んだよ」「はい」といのちのバトンを受けとることだと思う。

（本学 社会福祉学部社会福祉学科 教授）

## シリーズ 福祉にみる “いのち” ③1

# 生きる力を育む音楽教育エル・システム

疇地 希美

この原稿を依頼された時に、音楽教育関連で“いのちの教育”センターだよりにふさわしいトピックとして真っ先に思い浮かんだのがエル・システムだった。クラシック音楽ファンならば、エル・システムといえば若手指揮者ドゥダメルと彼の率いていたシモン・ポリバル・ユース・オーケストラのパワフルな演奏を思い浮かべるのではないだろうか。マラー国際指揮者コンクールで優勝して一躍有名になったドゥダメルはエル・システムで音楽教育を受けプロの音楽家になった人物であり、シモン・ポリバル・ユース・オーケストラはエル・システムの中で一番上位に位置づけられているプロフェッショナルなオーケストラである。

エル・システムはベネズエラで1970年代に生まれた貧困に苦しむ子ども達を対象とした音楽教育プログラムである。犯罪をするしか生きるすべがない、というような状況の子ども達を救うために公的予算を投じて、どんな家庭環境の子ども達にも分け隔てなく無償で楽器と音楽のレッスンを提供し、オーケストラでの演奏とその交通にかかる費用を補償している。オーケストラの演奏家を育てることはもちろん、組織を運営するための人員、楽器制作やメンテナンスを手がける職人、送り迎えのバスの運転手など、この活動を通じて多くの人々に安定した職も生み出してきた。

この活動はベネズエラだけに留まらず、今では海外にも広がりを見せている。貧困が表出しにくく、学校外での音楽教育の市場がすでに確立している日本ではこのシステムは受け入れられないのではないかと思われたが、3.11の約1年後から被災地である相馬市、大

銚町や被災者を受け入れている駒ヶ根市などで活動が始まり、今もエル・システムジャパンとして活動が行われている。

オーケストラの活動では、音楽を楽しむことができるのは勿論だがそれ以外にも学べることが多い。大人数で音楽を共に奏でる経験を通して、組織の中で一つの役割を担うことを学ぶ。簡単ではない楽器の演奏に段階的かつ長期的に取り組むことで、演奏技術と共に、努力し続けることを学ぶ。オーケストラとして成立するためには全ての楽団員が楽器を持って決められた時間と場所に集合しなくてはならないことから、ルールを守ることを学ぶ。より豊かな音楽表現を集団で行うために、団員の音を聴き合い、ボディランゲージを読み取り、息を合わせて演奏することから、人に合わせること、感情を共有することを学ぶなど、オーケストラでは社会の一員として生きていくのに必要なスキルを学ぶことができる。

音楽することは、生きる力を育むことにつながる。それは、幼児期のクレーンゲーム、喃語とマザーリースのやりとりからすでに始まっており、手遊び歌やわらべ歌、幼児歌曲を通して子どもが言葉や文化など様々なことを学ぶことにも通じる。「どの子も育つ、才能は生まれつきではない」という思想をもとに作られたスズキ・メソッドをベースにしているエル・システムは、音楽教育を通して全ての子どもに生きる力を与えている。

このことから、単なる音楽の演奏技術だけではなく様々なことを学生に伝えられたらと願いつつ日々音楽指導を行っている。

(本学 社会福祉学部社会福祉学科 講師)

## 『徒然草』からの出発

森村 森鳳（張偉）

私が『徒然草』と出会ったのは、38年前の大学2年生時のことであった。

1977年、文化大革命が終わった翌年、中国では、10年にわたって廃止された大学入試を再開した。10年間溜まった高校卒業生が一斉に入学試験を受けたため、合格率は1%であった。私は、日本語を学びたかったのであるが、競争の厳しさを案じて、最も得意とした中文科を志願した。

希望通りに中文科に入学した私は、中国言語文学を専攻しながら、独学で日本語を学び始めた。毎朝、早めに家を出てトロリーバスを二駅手前で下りて、歩きながら単語を暗記する。ある大雪の後、私はいつもの通り、二駅前でバスを下りて、雪が積もった道を単語の暗記をしながら歩いていた。しばらくして、自分の後をついてくる足音にハッとして振り返ると、外国文学の授業を担当している金先生がおられた。金先生は韓国の方で、中国の大学で中国言語文学を専攻し、卒業後、大学に残って教鞭を執っておられた。

当時、故郷の長春では日本文学を紹介し始め、日本文学作品の翻訳の仕事も始まり、金先生はその中心メンバーの一人であった。その仕事は合同作業であったが、人手が不足していた。金先生は私をそのスタッフの一人として育てようと思われたので

あった。

翻訳の仕事の最初の試みは吉田兼好の『徒然草』の第188段の一部、「ある者子を法師になして」という短い文章で、「長春晩報」に載り、「豆腐の塊」といわれる小さい一隅の版面を占めたものであった。私の文筆の道はこの“豆腐の塊”から出発した。その後、『日本笑話集』の共訳の出版、阿部公房の『方舟さくら丸』・野間宏の『暗い絵』の翻訳出版など、金先生のおかげで、私は本格的に日本文学の翻訳に取り組んだ。

日本に来る前に、私は金先生を訪ね、感謝の意を表した。先生は「人生の道では特に誰に感謝することもなし、誰をも恨むこともありません。その道は自分の両足で歩いたものですから。身を軽くして堂々とこれからの道を歩いて行ってください」とおっしゃった。

その後、金先生は韓国に戻り、音信も絶たれた。今、たどって来た人生の道を振り返るとき、先生がおっしゃったように歩んでこられたとは言えない。でも、私は、金先生の姿を教育者の手本とし、「一事を必ず成さんと思はば、他の事の破るをも傷むべからず、人の嘲りをも恥づべからず」という兼好法師の一文を人生の座右の銘として人生の道を歩んできたと思うのである。

（本学 文学部人文学科 准教授）

# 同朋大学“いのちの教育”センター講座一覧

連続いのちの講座 テーマ “いのち”の教育

会場 Do プラザ 閲覧  
無料

7/24(火) 17:00～18:30

## 古代エジプト人の来世観

講師 古川 桂 (本学 文学部 専任講師)

9/20(木) 17:00～18:30

## 人生100年時代・最期まで自宅で過ごすために

講師 鈴木 淳子 (本学 社会福祉学部 特任講師)

10/30(火) 17:00～18:30

## いのちの輝きを求めて ～社会福祉と私～

講師 寺西伊久夫 氏 (社会福祉法人愛知育児院 理事長)

11/13(火) 17:00～18:30

## 発達課題(ライフタスク)と人生

講師 石牧良浩 (本学 社会福祉学部 准教授)

12/6(木) 17:00～18:30

## 死を見つめて一壊れる身体一

講師 蒲池勢至 (本学 文学部 特任教授)

### 所 員

- センター主幹：安藤 弥 (文学部 教授)  
 所 員：木野美恵子 (社会福祉学部 教授)  
 所 員：森村森鳳(張偉) (文学部 准教授)  
 所 員：石牧 良浩 (社会福祉学部 准教授)  
 所 員：市野 智行 (文学部 専任講師)

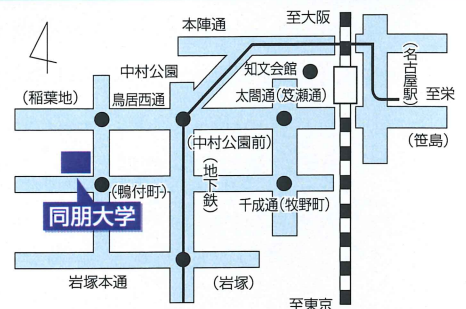
### お問い合わせ先

同朋大学 “いのちの教育” センター

〒453-8540 名古屋市中村区稲葉地町7-1

☎ 052-411-1373

### 同朋大学 周辺地図



交通 市バス/米又は笹島より②系統稲西車庫行、鴉付町下車  
 地下鉄/中村公園より⑨系統稲西車庫行、鴉付町下車